ISSN 1226-4660

日語日文學

第26輯

目 次

日本語・朝鮮語の境界とモンスーン・アジア文化圏
-水源地形名numa<*nub（沼・泥）の「b－m」音韻対応- …… 安 部 清 哉 …… 1
「新聞社説(論説文)」에 나타난「文末ものだ」에 대하여
-使用頻度数에 의한 分類를 中心으로- …… 朴 廷 根 …… 21
中世における「うつくし」の意味について …… 黄 龍 夏 …… 41
日本語複合名詞のアクセントについての考察 …… 강 미 애 …… 51
「～にくい」「～がたい」「～づらい」に関する一考察 …… 権 奇 洙 …… 71
言語類型論的な立場から見た日本語の基本文型 …… 朴 善 玉 …… 85
효율적인 한-일 일-한 동시통역 학습방안을 위한 고찰 …… 이 유 아 …… 103
한국인 일본어학습자의 발음오류에 관한 고찰
-청해 테스트의 결과분석을 중심으로- …… 김 용 각 …… 123
일본현대시와 애니미즘 …… 정 승 운 …… 135
日本批評史研究Ⅵ-「マチウ書試論」論- …… 吳 京 煥 …… 155
서민적 여성의 이에(家)와 역할-『今昔物語集』를 중심으로- …… 감 영 희 …… 169
孤独하고 憂鬱한 푸른 靈魂-朔太郎詩의〈海〉에 関하여- …… 崔 蓮 姫 …… 187
『伊勢物語次第条々』について -鎌倉時代の古注との関係を中心に- …… 金 任 叔 …… 205
강을 주제로 한 일본시 고찰 …… 임 온 규 …… 217
日露戦争と小杉未醒の芸術活動 -反戦意識と芸術的形象化を中心に- …… 金 仙 奇 …… 247
근대일본의 실업교육 양상과 근로주의
-『尋常小学修身書』를 중심으로- …… 李 鉼 菅 …… 267
韓国に進出している日本系宗教の宗教的位置と信者の属性
-天理教、生長の家、世界救世教の比較分析- …… 李 元 範・南 椿 模 …… 291
挿画를 통해본 昭和期『尋常小学修身書』의 国民教化 …… 김 순 전 …… 307

大韓日語日文學會
2005. 5.

日本語・朝鮮語の境界とモンスーン・アジア文化圏

－水源地形名numa＜*nub（沼・泥）の「ｂ－ｍ」音韻対応－

安部 清哉＊

HP－http://page.freett.com/abeseiya/　E-mail:aseiya@star.odn.ne.jp

＜要　旨＞

The distribution of some words and the anthropology phenomenon in the area of Monsoon Asia was shown. With that, the necessity of the researches into Monsoon Asian cultural sphere was discussed. That is, the large distribution of the word which means swamp *nub was shown here, in addition to *nahdi and *sungwa which are the example of a distribution of the name of the river in a climate region called Monsoon Asia taken up until now. By this, the possibility of a substratum of old language in the Monsoon Asia cultural sphere increased more. Moreover, it was pointed out also that there is a 'b－m' sound correspondence in Japanese, Chinese, Korean, and Ainu language in east Asia.

ワード：モンスーン・アジア文化圏 (the Monsoon Asia Cultural Resion)，ｂ－ｍ交替形 (b－m alternation pattern)，河川水源地名（the place names of watersourses），音韻対応 (a sound correspondence)，言語地理学 (geolinguistics)

――［numa］（沼・池）は、果たして何語か？――

①「新羅国に１つの沼有り。名は阿具奴摩［アグヌマ］＜阿より下の四字は音を以ゐよ＞と謂ひき。」『古事記』中巻

② 漢山州「内米忽（一云池城、一云長池」（「内米」は、「長い池」か沼か、それとも海か）『三国史記』巻第３７雑志第６地理４高句麗（漢山州は新羅時代の州名。今の広州）

０．プロローグ――「奴摩」（ヌマ）いう「新羅」地名は、何語か？

上記①の「アグヌマ」を、岩波書店の旧大系本では、下のaのように「ヌマ」のみ日本語ととる。一方、小学館旧全集本ｂは、アグヌマ全体を未詳とする。

＊ 学習院大学文学部 教授

◎a「アグ沼。アグは朝鮮語か日本語か不明。」旧『日本古典文学大系』頭注
◎b「名義、所在とも未詳。」旧『日本古典文学全集』頭注

「奴摩」は、直前の本文にある「沼」の日本語の訓ヌマと確かに同音ではあるが、「奴摩」のみが日本語として記された明証はない。「四字は音を用いよ」とあるから、少なくとも、書き手は四字をもって固有地名と扱ったと解釈するのが自然な解釈であろう。「阿具沼」ではないから、新羅固有名詞アグに日本語ヌマを付した当時の混成複合語である、とは直ちには断じがたい。全集本のように、全体として固有名として考察しておく余地があることがわかる。では、この「奴摩」は、果たして偶然日本語ヌマと同音であった「新羅語」なのだろうか。

1．はじめに――モンスーン・アジアMA諸語の分布

日本語にある古層語に属すると考えられる単語を、言語学的に近隣言語に探っていくと、思いのほか多くの周辺の言語、しかも近隣ばかりでなくかなり遠方の言語にも、関連性が認められる単語が見出せることに気付く（参考文献の安部1997以降の拙論参照）。しかも、そのような言語は、従来の研究のように、問題とする1単語につき1言語にのみ同源語がある――つまり、A語は韓国語、B語は中国語、C語はオーストロネシア語に同源候補語がある――というのではなく、1語ごとに同源と思われる語形が、周囲のいくつか複数の言語に同時に見られるのである。そのような指摘はこれまで皆無ではないが、ほとんど顧みられることはなかったと言ってよい（この現象を指摘し、慎重にかつ無理のない考察で注意を喚起した先行研究として、ここでは鈴木秀夫1987のみを挙げるに留める。それよりも範囲は狭いが、近年の村山七郎氏がアイヌ語と日本語とオーストロネシア語を同時に指摘するものなどもそのようなものに含められるが、それら新しいものについては機会を改めて触れたい。）。

筆者も、そのような現象に気付き（あべ1997.4），一連の拙論（安部2001.8、2003.3、2003.7、ABE2003.7ほか）で、日本語の河川地形名（ナイ・サワ）が、モンスーン・アジア地域（Monsoon Asia Region,=MA）に広く分布していることを指摘した。また、それによって、河川地形名の研究が、欧州やシベリアでの研究と同様に、MAの言語史研究に有効であることも合わせて示した。河川名の研究が有効であるのは、人類の生存に不可欠な水の供給源の名称であるからと考えられる。水源であるという点から考えると、河川だけでなく、湖や沼・池、湿地などの名称も、同様に言語研究に有効であることがわかる。

また、河川名ナイの研究によって、MA領域には、下記のような多くの文化的共通性が指摘できることを、おそらく世界的にも初めて明らかにした（後掲地図参照。関連地図の一部は安部HP参照）。その文化的諸特徴の背景には、モンスーン（M）気候という気候学上の共通特徴が指摘できるから、この領域の文化的共通性は、Mという気候によって、極めて長い期間に亘って形成されてきたものと考えられる。

そのような、共通性をもつ文化領域という解釈に立ち、筆者はこの領域を「モンスーン・アジア文化圏 Monsoon Asia Cultural Region」と名付けた(安部2003.7、安部2004.7)。

《モンスーン・アジアＭＡ領域の文化人類学的諸特徴》

（後掲地図①～⑬と対応する（番号順序前後あり）。⑭の分布図は安部2004.12参照。《Ｉ》番地図は河川名*nahdi、《II》番地図は同じく*səŋwaの分布地図。安部ＨＰも参照）

①「類別詞」Classifiersのアジア・太平洋での分布範囲

②気候区域としてのMonsoon Asia

③アジア・太平洋における夏季（７月）の降水量100ミリ以上の領域

④アジアのchopping tools（打製石核石器群）の分布領域

⑤ヤムイモ（温帯種・熱帯種）の分布領域

⑥サトイモ科の分布領域

⑦酒類分類における麹発酵酒＋唾液発酵酒の分布領域

⑧トラの本来的生息地域

⑨アジアの植物区系

⑩中国の農耕領域

⑪オーストロネシア語の源郷と拡散地域

⑫ハツカネズミ（キャスタネウス型、Hbb　d型を含む）の世界的分布領域

⑬東洋における神話の類型的分布領域（フロベニウス1938、安部2004.12で追加）

⑭ＭＡ海域におけるタカラガイ（宝貝）類の分布領域（白井正平1997、安部2004.12で追加）

本研究では、これまで取り上げてきた河川地形名の

Ｉ、ナイ＜*nahdi（日本語、アイヌ語、韓国語ほか）［安部2001.8，安部2003.7,ABE2003.7］、

II、サワ＜*səŋwa　（日本語＊河川湖沼沢湿地、オーストロネシア語*suŋay川、アイヌ語sar・sa葦原沼沢湿地）［安部2004.5口頭発表，安部2004.7］の続編として、３番目の水源地形名として、IIIヌマを取り上げる。そして、日本語、韓国語・北朝鮮語（以下、合わせて朝鮮語とする。補記参照）・アイヌ語のほか、モンスーン・アジアＭＡ諸言語の関係と、これらの諸言語の「境界」の問題について考えてみたい。

２．日本語のヌマ・ヌバ

２－（１）.日本地名におけるヌマの分布と古さ

ヌマ沼は、上代文献に既に例がある古い語形である。西（奈良時代の万葉集）でも使われた。一方、地名における分布は、北関東・新潟以北の北東部に偏る（地図参照、鏡味完二1958）。そのヌマの西側にはイケ池（語源「*生ケ」＝岩波古語・森重敏）が分布し、ヌマとイケとは相補的分布をなす（その境界線はほぼ「奥東京湾－柏崎線」安部2003.7と重なる）。イケは、地名としての偏りや潅漑用水としての発達（「耕作の用水池」『時代別国語大辞典　上代編』）や、他の同様の地名分布（タニほか安部2003.3、安部2003.7参照）から見て、新しい段階の語形であり、一方、その北に残存するヌマは日本語として相当に古い語と考えられる。

2－（2）．ヌマ沼と枕詞ヌバタマ（黒玉・泥玉）

日本語ヌマの同源語を近隣言語に探す前に、日本語内部での「内的再構成」（安部2004.7も参照）によって、異形態や祖形を検討しておきたい。

まず、上代には一音節ヌもあるから、ヌ＞ヌマが推定されているが、その場合のマは未詳であった。

ところで、枕詞ヌバタマ（黒・闇に懸かる）のヌバとヌマとを同源とする説がある（佐竹昭広1955）。佐竹氏は、ヌバタマは黒玉と同意で使われた語で（上代に白玉はあってもクロタマは無く、ヌバタマのみ）、ヌバには黒の意味も含まれ、このヌバはｂ－ｍ交替をなすヌマと同源で、「濁って泥深い気持ちをたたえているもの」がヌマ・ヌバの本来の意とされた。佐竹氏は、沼などの泥の視覚的印象が「黒の色名と化」したとする。この佐竹説は「ヌバ＝黒色」の有力な語源説の一つで、『時代別国語大辞典　上代篇』に「古代の色彩名に黒をあらわすヌバがあったことを推定する説もある。すなわちアイヌその他の諸言語における色彩の命名法を参考にして、沼－泥－黒という意味変化が想定されるという。」と引かれる「説」である。後に検討する近隣言語の語形から見ても、この佐竹氏の解釈は妥当なものと考えられる。この枕詞に残るヌバを古い語形と考え、それに、濁音の前の入り渡り鼻音を考慮して語形変化を推定すると、次のような語形変化が考えられる。

◎　*numba　＞　nuba ＞　numa（日本語、ヌマ）、

これらにヌを加え、ヌマの関連語形は，*numba、nuba、numa、nu（*nub：[1]）となる。また、意味的には＜沼－泥－暗黒＞それぞれを表す単語が調査対象範囲となる。

---

1) ヌ・ヌバ・ヌマという異形態と、古代日本語における閉音節語の可能性も視野に入れるなら（さらに後述の韓国語・アイヌ語も考慮するならなお一層）、*nubヌ＞*numbヌ（＞*numヌ＞nuヌ）＞numbaヌバ(＞nubaヌバ)＞numa(ヌマ)という派生関係と考えられる。これらからは、日本語のヌも*nubに遡り、朝鮮語・アイヌ語と同源の可能性の高い古い形態と考えられる。（*nub＞nup韓国語・アイヌ語）。（あるいは、ヌにはこれとは別に「ヌタ・ニタ（泥・湿地）」などの*nutが関わった可能性も残る（注４参照）。

2－（3）．〈沼沢湿地－泥土〉の意味的連続の普遍性

佐竹説の妥当性を補強する意味で、〈沼－泥〉の意味的連続性が特殊なものではないことを確認しておきたい。オーストロネシア語族（AN）の以下の語においても、同じ語が泥と沼の両義をもていることが広く確認できる。オーストロネシア語（AN）の語彙集ＣＡＤ1995の「01.214mud」（泥）「01.380swamp」（沼沢地・湿地）の意の項目には、「泥－沼」両義をもっている言語（大文字）が多く報告されている（下記では個々の単語は省略し注記のみ引用する）。

01.214 mud	ＢＵＲＵ　mud,swamp
	ＴＡＫＩＡ　geo-geo　(cf.　geo　01.380swamp)
	ＭＯＴＵ　mud,swamp
01.380 swamp	ＢＡＬＩＮＥＳＥ　deep mud,as in ricefield
	ＡＤＺＥＲＡ　mud
	ＬＥＷＯ　mud hole

このような「場所・自然地形⇔そこによくある事物」という関係がある類似する意味的連続は、ほかにも認めることができる。例えば、日本語のサワ（スガ）における「小川・沼―砂・砂洲（・葦原・草原・原野＝アイヌ語）」（安部2004.7、安部2004.12）、日本語方言のクロ（グロ）における「畦畔―叢・植込み・茨」（安部2005印刷中）などである。意味的連続性の普遍的パタンとしても注目される。

◆　意味的連続性の共通パタン

語形　　「自然地形・場所－　そこによくある事物」

ヌマ・ヌバ「沼　　――――　泥」（安部、本稿）

サワ・スガ「小川・沼沢　――　砂・砂洲・葦原・菅・草」（安部2004.7、安部2004.12）

クロ・グロ「畦畦　　――――　石草などの堆積物・植込み・叢・茨」（安部2005印刷中）

3．〈沼－泥－暗黒〉のアジアの言語――朝鮮語、ツングース諸語、モンゴル語、チベット語

上記２－（１）の意味（沼－泥－暗黒）の語形を近隣言語に探してみることにしたい。まず、既に佐竹1955によって朝鮮語、モンゴル語、アイヌ語が指摘されている。佐竹氏の論文は、本来色名の研究としてクロ以外の黒色ヌバを明らかにする目的で上記言語を挙げられたものだったが、その該博な言語知識は、水源地形名ヌマの研究への道標を示された。その重要性はこれまで長く埋もれ忘れられていた。以下、順に掘り起こして検討してみたい。

3－（1）．韓国語（朝鮮語）のnɯp（沼）

佐竹1955は、日本語ヌバ・ヌマの同源として、現代韓国語・朝鮮語nɯp沼を挙げられた。この対応は、既に古くから白鳥庫吉1898、大野晋1957、Martin1966、宋敏1999ほかによっても指摘されているが、nɯp以外に次の語形を考慮する必要がある（以下、朝鮮語の場合、印刷の関係で、ɯをnupで表記する場合がある）。これら3語形は、上記推定語形に酷似する。

①nɯ p　　沼　現代韓国語（朝鮮語）

②numa（奴摩）沼　古代新羅地名（『古事記』）

③*nuami（or,*nai　mi)(内米)沼・池・海　『三国史記』巻第37雑志第6地理4高句麗

②は冒頭の『古事記』の例を仮に新羅固有語と見た場合である。

③は確実な事例ではなく、いささか長い注が必要であるがここでは簡略に記す。

『三国史記』の景徳王改称地名に「内米忽（一云池城、一云長池）」の併記がある。「海」の漢字があるにも関わらず「池／長池」とした意訳の背後には、「内米」を「沼＝長い（大きい）池」と解釈した可能性を読み取ることができよう2)。その③の語形は、朴炳采（1968）に「『内米』の中古漢音はnuai-mieiであり、国語【注:韓国語】漢字音はnaimiと推定」（原文の韓国語を拙訳）するが、*nua-miなども推定可能であろう(藤堂明保『漢和大辞典』での中古音は、内nuəi米mei)。

いずれにせよ、これらからは、韓国語・朝鮮語にも、日本語nuba、numba,numa、nu，に酷似する沼

---

2) この「内米」にはもう一箇所、巻35に同様の改称地名があるが、そちらは下に引用したように明らかに「海」と取れる。その例の存在から見ても、この当該箇所（巻37）での海の可能性を完全に否定することはできない。一方、その可能性とは別に、①巻35の例のように「海」の漢字がありながらやや意味の遠い「池／長池」を敢えて選んでいること、②『古事記』の新羅地名numaがあること、③本文に挙げたように、モンゴル語namug沼やチベット語'dam沼など、近隣にm語形を持つ「沼」があること、④古代日本語にnumaがあること、⑤MA領域、特に東アジアにはナイ・サワ・ニタ・クロほかの水源地形名には連続性が強く認められること、などから、「内米」を、海ではなく「沼沢湿地」の意で使用していたような用法が、例えば韓半島（朝鮮半島）の南（新羅）の「方言」（例えば＊numeiなど）として――海の意とはまた別に――「併存」した蓋然性も決して低くないと考える。

海と解釈されたもう一箇所の例は、「漢州／瀑池群。本高句麗内米忽群。景徳王改名。今海州。」『三国史記』巻第35雑志第4地理2高句麗（「漢州は本高句麗漢山群」）の例である。「瀑池」は意訳すれば「水が立つ池」であるから、波の立つ海であろう。「海州」の字もあり、ツングース語の1つウイルタ語にnamu海があることなどから、ここでは同じ「内米」の意味が「海」の理解であることはまず確実であろう。

なお、韓国の研究者である朴炳采（1968）では巻37の例を海と取り、都守熙（1977）宋敏（1999）は共に、巻35巻37の2箇所とも海としていることは十分考慮したが、それでも上記の可能性はなお残っていると解釈される（付言すれば各氏とも日本語のナミ波を同源として引くが、日本人の語感では両者の関係はやや遠い。日本語ナミはむしろ動詞ナム（並、四段）の連用形名詞化したもの（並んだものの意）と考えられる（ナミ波＜並ミ、家並み・並木などと同源）。

補足すれば、一方で、モンゴル語namug沼とツングース諸語namu海の語形と意味の近さは、この領域における〈沼－海〉（湖池等も含めた「大きな水溜り」の意味で）の意味的連続性や意味的未分化の状況を推定させる。それを考慮すると、朝鮮語「内米」も、「広く多くの水が湛えられた場所」というこの領域の古い祖語の意味が、一方（一方言・一言語）で「海」、他方（他地域・他言語）ではたまたま「沼」という、2様の意味で記録されたということを示しているのかもしれない。

関連の語彙があったことがわかる。

3－（2）．モンゴル語、チベット語、ツングース諸語、ムンダ語

次に、モンゴル語、チベット語について見てみたい。佐竹1955は、「蒙古語」の沼としてnagur,noorを挙げている。しかし、これらの語形はいずれもまだ確認できていない3)。一方、沼沢・泥濘地として次の［namug］を得た。

◎A「ＨＡＭＡΓ［namug］［名］沼沢、泥濘地；深みにはまること。」小沢重男（1994)『現代モンゴル語辞典改定増補版』大学書林

◎B「ＨＡＭＡΓ n.marsh,swamp,bog.（名）沼地、湿地」D.Tｏｍｏｒtogoo（1979)『現代蒙英日辞典』開明書店

母音－a－uが、numaとは逆転しており問題があるが、母音転倒という解釈の余地もある。さらに近隣言語を検討すると、チベット語に類似する次の「沼・泥」がある。

◎C「沼 marsh ′ｄａｍ（′ｄａｍ）〈沼地〉」

◎D「泥 mud ˆｄｚａｂ（ｒｄｚａｂ）〈泥〉」北村甫・長野泰彦（1990)『現代チベット語分類辞典』汲古書院

これらは、語頭のｄ－ｎ交替語形（語中はｍ－ｂ交替形）と見ることができるから、第１音節母音ａの上記モンゴル語namugと同源である可能性が高い（nam～＞′dam・*dab）。

さて、このようなnam～・dam～（沼・泥地）の存在を見ると、以下の先行研究の挙げるツングース諸語（ウイルタ語、満州語、ゴルジ語、エウェンキ語、ラムート語）の「海」を表す語形にも目を向ける必要があることがわかる。（先の高句麗地名「内米」の海の意が、以下のツングース諸語と同じである点も、高句麗語の系統と関わって興味深い。）

◎E「namu s.[acc nammoo] うみ（海）－sea.」池上二良（1997）『ウイルタ語辞典』

◎F「Ma.Gol. namu,Ev.lamu＜*namu'sea'」Ma.満州語、Gol.ゴルジ語、Ev.エウェンキ語。朴炳采（1968)

◎G「Tung. namu（海）」都守熙（1977)

◎H「Lam. nam（海）＜*namu。」Lam. ラムート（エウェン）語、宋敏（1999)

語形は、nam～で共通している。意味は先の沼と海との相違はあるが、河川湖沼沢湿地泥濘地を表

---

3) 佐竹氏が、語形のやや異なる「蒙古語nagur」を挙げた理由は説明がない。一方、類似する語形として、チベット語「黒い」が得られた。nagurは、いずれかのモンゴル語から得られた「黒い」の例として挙げたものであろうか。
◎「黒い black ′nago～′nagbo(nag po)〈黒い〉」北村甫・長野泰彦（1990）『現代チベット語分類辞典』汲古書院
「蒙古語nagur」にせよ、このチベット語にせよ、この語幹nag-の語形を、これまでのものと同列に扱うには問題がある。一方,中国語「三卓（淖、三水に卓の字、泥の意）nɔg」「濘nieng」、そのｎ－ｄ交替形と考えられる「（泥を）塗 dag」、チベット語「′dagba（′dag ba)泥」や、タイ語「nˇɔŋ沼」などを得ていくことによって、これらに共通する[nag,dag]等の語形を、広く検討する必要があることがわかる。

す語形は、広く水源関係の意味で使用幅があることが少なくない。例えば、先の佐竹氏の解釈やオーストロネシア語で見た「泥―沼」の両義性もそのようなものである。日本語サワ（異形態スワ・シガ・スガ）は小川・谷（川）・沼沢湿地のほか、湖［諏訪（湖）・琵琶湖のある滋賀（県）地方］の意をもつ。このように、川・池・沼・湖・海などには意味的連続性が認められる。因みに、地理的に少し離れるが、安部の研究で問題としているＭＡ領域内のタイ語でも、námはやはり水に関わり、「水、液体、川」という広い意を持つ（松山・坂本1978『タイ語基礎1500語』大学書林）。
これらからは、何らかの水源を表す祖語(*n～m～)から「沼」と「海」の意に分化している可能性は十分に考えられることがわかる。あるいはまた、下記ような沼から海への語形変化、あるいはその逆を想定することも可能であることになる。

◎ numa 沼地・湿地 ⇔ namu～ 沼沢湿地・泥濘地 ⇔ namu 海

ここでは、海の意の語形は、沼語彙とはひとまず別に扱っておくことにしようと思うが、それらの語も、形態的にも意味的にも関連する語彙であると言えよう。

なお、地域が離れていてまだ１語形のみしか確認できていないので、ここでは補足的に紹介するに留めるが、次のムンダ語の語形がある。ムンダ語は、ＭＡの西側にあって河川名ナイでも類似語形が見られた言語である。ヌバタマと同じヌバの語形で、意味的に連続する〈暗い・黒い（dark）〉の語形が見出せる。

◎Ｉ「Ｎｕｂā――dark」『Mundari English Dictionary』

中間の東南アジアは未調査であるが、ムンダ語はドラヴィダ語より古いインドの土着の言語で、無アクセント言語でもあり、執筆者はドラヴィダ語より注目している。ＭＡの西側の言語にも目を向ける必要があることが、河川名語彙ナイ・サワある同様に、この沼語彙でも指摘できるのである（saba小川がムンダ諸語の１つサンタール語にある）。

３－（３）．アイヌ語

次にアイヌ語を見る。佐竹1955は、ヌバタマのヌバが黒・泥の意をもつ傍証として、最初にアイヌ語の次の語群から、語幹＊nup（＊泥・濁水）を抽出してみせた。

◎Ｆ「アイヌ語　語幹*nup（＊泥、濁水）

nupur　ka（形容詞，黒くする）、
nupki（泥だらけになる、濁水の如く濃厚なる）
nupki　at，nupki　ot（泥だらけの）

nupur（黒い、濃厚な、濁った、暗い）

服部四郎『アイヌ語辞典』にも、「濁る」として諸方言の「núpki」が挙げられている。佐竹氏のこの＊nupの推定は適切と思われる。さらにそれを補強する語幹の解釈に、「nu-p　泥炭の原野」（片山竜峯1993『日本語とアイヌ語』）を見出した。片山氏によればアイヌ語nupは、泥だけでなく「泥炭の原野」つまりほとんど湿地と同意で解釈できることがわかる。

このアイヌ語の語形*nupは、朝鮮語nɯ　pとほぼ同形である。泥と沼との意味的近似は２－（３）のように諸言語に見られたから、アイヌ語の「泥・濁水」「泥炭の原野」もほぼ「沼・湿地」と同義と見させよう。また、アイヌ語・朝鮮語の２言語の歴史的関係と生活に必要な水源語彙という性格から考えて、単純なる「借用」説も成り立ち難い。これらから総合して、アイヌ語＊nupと韓国語nɯ　pとが同源である蓋然性はより高まったと言えよう。

加えて、多くの先行研究も指摘するように、日本語numaと朝鮮語nɯ　pが同源であるとすると、日本語・朝鮮語・アイヌ語は、沼語彙（*nub）を共有していることになる。これは、ナイ(*nahdi)の場合の安部の指摘に次いで、系統不明のこれら３言語の間での２つ目の河川名の共有を初めて指摘した解釈となる。

４．日本語と韓国語（朝鮮語）

３章まで、ＭＡ文化圏諸言語に認められる〈沼－泥－暗黒〉の意味の単語分布を見てきた。ここで一旦、日本語・韓国語（朝鮮語）について振り返り、冒頭のアグヌマの出自について考えてみたい。

まず、日本語では、numaよりも、独立用法がなく意味不詳になっていた枕詞のnubaがより古そうである。また、隣接する韓国語と列島北部に連続するアイヌ語nupとは、次のような派生関係を考えることで、その同源の派生関係を位置付けることができる。このように見ると、日本語で古形とも見られる一音節語nuも、この＊nubが語源とも解釈できることがわかる。

◎　*nub（>nupヌ），>numbヌ（>*numヌ），>numbaヌバ（>nubaヌバ）、>numaヌマ

それでは、冒頭に取り上げた①アグヌマは、これらの解釈を踏まえるとどのように位置づけられるであろうか。次の諸点から見て、韓国語である可能性も十分にあると解釈できよう。

（１）韓国の近隣言語に、母音こそ違うものの子音「n(d)～m～」をもち「沼沢湿地・泥土」の意のモンゴル語・チベット語がある。これらからは、新羅語が、現代韓国語nup　と異なる～ｍ～をもっていた可能性が考えられる。

（２）現代韓国語nupのｐ音がどの地域の発音を伝えるものかは未詳であるが、安部2001.8、2001.11ほかに挙げた韓半島（朝鮮半島）における南北での方言境界線　（ＭＡ中央気候線）では、日本語・中国語と同様に、北のｐ・ｂに対して南でｍ　が現れる可能性が指摘で

きる。それゆえ、日本列島上の「北nup（アイヌ語）　南　numa（日本語）」と同様に、北部のnup（現代朝鮮語）に対して南の新羅語（方　言）音で*num～・numaが現れる蓋然性が高い。

（3）冒頭②に引用した『三国史記』の「内米」（？*nuami,*naimi）と改称地名「池／長池」との対応からは、「内米」はnumi,あるいはまた、namug（モンゴル語形）　など に近いmの方言語形を表す可能性がある。そのm形は、海に限らず沼などを　含む広い意味での水源語彙であったと考えられる。

以上3点から、冒頭①のアグヌマのヌマは、朝鮮語の一方言としての新羅語（方言）であった可能性もあり得る、と考えられよう[4)]。

ところで、日本語・アイヌ語と大陸の語形との関係について、佐竹氏は「日本語もアイヌ語も等しく大陸から各自別途にこれを借用したのであり、両者に直接の相互関係はないと考えられる。」（下線引用者）とされた。

河川名は、ヨーロッパ（Krahe,H.1926）やシベリア(Schostakowitsch、W.B.1954)での言語史研究でも指摘されてきたように、極めて重要な語彙であり、古い言語分布を投影する性質が指摘されている（詳しくは、安部2001.8、ABE2003.7参照）。また、水は、人類の生存に関わる必需品で古くからの日常生活語彙であるから、借用の多い文化語彙とは異なって、簡単に借用が行われる語彙とはみなしにくい。そのような語彙を、沼も湖も実在した日本人とアイヌの人々が別途に大陸から「借用」しなければならない状況や段階とは、いったいどのような状況や歴史的時代を想定することになるのであろうか。例えば相当に古い時代となれば、「借用」という表現が適切かどうかという問題にもなりそうである。また、ヌマだけでは足りず、ナイ（川）やサワなど河川名をいくつも別途借用したということになるのであろうか。

ムンダ語（nubā〈dark〉）が見られたのでもわかるように、ヌマ1語で「借用」か、あるいは、3言語間のみでの同源か、などの結論を急ぐ前に、MA領域での他の多くの単語の分布を、今後さらに研究していく必要があると考える。

5、東アジアにおける言語境界線上の南北音韻対応の法則「*b・p－m」対応

さて、日本語・朝鮮語・アイヌ語の3言語に、同源の蓋然性の高い語形*nu b認めた。3言語の言語系統論上の系統（無関係）を捨象し、各語形の地理的分布に着目するとさらに興味深い傾向が指摘できる。

韓国語nupのp音の地理的由来は未詳であるが、仮に北部の方言音とする。南の新羅語numaはm

4) このことは、賢明な方にはお読み取りいただけるように、（アグ）「ヌマ」が日本語とは決して解釈できないということを意味するものではない。『古事記』の新羅地名に言語史学的にどのような解釈の余地があるか、その看過されていた解釈の可能性を示したものである。

音である。その「北－南」の「ｐ－ｍ」は、日本列島における北のアイヌ語nup、南の日本語numaにおけるｐ－ｍと対応していることがわかる。

しかも、この北南でのｐ－ｍ対応は、安部（1999.9,2000.3修正）で示した東アジアの南北音韻対応「北b・p－南m」とも一致している（表１参照）。（日本語のヌバのｂ音も、ｍに変わる前の古い日本語音）5)として考慮されるが、いま音声的に近いｐの異音とみなせること、また、安部1999.9では「北b・p」と北方の特徴としているので、表のように、北方音として位置づけておく。）

【表１　〈沼・泥〉に見られる［ｂ・ｐ－ｍ］の東アジアの南北音韻対応の法則】（※は推定位置）

音韻對応	半島部	列島部	大陸部［中國語否定詞］（橋本萬太郎1978）	
*b,p 北方音	朝鮮語※nup（*北部朝鮮語）	アイヌ語　nup（日本語　nuba）	不*piuə(g)　弗*piuət　非piuə(d)	破裂音
m　南方音	新羅語　numa	日本語　numa	無*miuəg　勿*miuət　微miuə(d)	鼻　音

「ＭＡ中央気候線」（安部1999.9）の南北における東アジアの音韻対応の法則［ｐ・ｂ－ｍ対応］）

半島部の言語（朝鮮語）と列島部の言語（日本語）とが、「*ｂ・ｐ－ｍ音韻対応」をもっていることがわかる。この南北の境界線はほぼ「ＭＡ中央気候線」（安部2001.11、安部2002.11.10）の位置とみなすことができるから、新羅語も含めた４言語の地理的位置関係が、この対応を形成している１つの要因であることを併せて示している。この表は、語形と位置との対応を同時に示している点で、アジアの3言語以上にわたる体系的「音韻対応」を示した、おそらく最初の研究であると思われる。

さらに興味深いことに、この「*ｂ・ｐ－ｍ音韻対応」は、中国語方言に見られる南北の方言音対応とも並行していることに気づく。中国語の北方方言音ｂ・ｐが南方方言音ｍと対応することは広く知られている（例えば、「馬」「猫」のｂ－ｍなど。これは日本漢字音の漢音・呉音におけるｂ－ｍ対応にも投影している）。

中国語では、沼の*nubに対応する語形はまだ見出せていないので、いま、橋本満太郎1978が挙げる「否定詞」に体系的に現れるｐ－ｍ対応を、表1右側に併記してみた。これらの境界線も同じ「ＭＡ中央気候線」の位置であるから、大陸部・中国語のｐ－ｍ対応は、列島部・半島部の対応と同じ地理的背景をもつ現象と解釈できる。

以上、半島部・列島部の単語と、大陸部の単語は同じではないが、上記５言語のｂ・ｐ－ｍ対応を、東アジアに認められる広義の「音韻対応」として、具体例をもって初めてここに示した。

---

5) 日本語には、いわゆるｂ－ｍ交替の中でも古い段階のｂ→ｍへの変化傾向が推定され、ヌバ→ヌマもそのようなものの１つと位置づけられる。例えば、べー（牛の泣声、参考ベコ）→モー（方言分布）、クボ・クブ(蜘蛛)→クモ（方言分布）、ボリ（森）→モリなど。

では、なぜこの位置に上記のような対応が生じることになったのであろうか。それについては、安部（1999.9、2000.3修正）で示した他の南北音韻対応とも共通する音声的傾向（破裂音－鼻音）をもつことから推して、現在、気候の影響を要因とする発音の相違（鼻腔―口腔呼気比率の相違）という見通しを持って調査と考察を進めている。詳しい解説が別に必要であるが、これらの研究は、機会を改めて順次取り上げていく予定である。

6、おわりに――モンスーン・アジア諸言語の記録保存と研究学会

日本語、韓国語（朝鮮語）、アイヌ語を中心に、ＭＡにおける「沼沢湿地－泥土－暗黒」を表す*nub・nupを見てきた。このようなＭＡにおける広域分布を示す事例は、これまで取り上げた*nahdi, *suŋ・waについで３語目になる。
今回は詳しくは取り上げなかったが、この他に同じく「泥－沼沢湿地－暗黒」を表す*nitが、日本語・中国語・アイヌ語・ムンダ語などに確認できる6)参照）。さらに、◆注３に挙げた語形*nag～も考慮すると、ＭＡには語頭［ｎ～］を共有する「沼沢湿地－泥土－暗黒」を表す語彙が広く分布していることがわかる。また、5章の表１で、東アジアにおけるある種の「音韻対応」を初めて具体的に提示した。

これまで、本研究のように、同時に４言語以上の複数の言語の語形を、広域を視野に入れて比較した研究は必ずしも多くはない。ユーラシア大語族説やノストラティクス論を別とすれば、このアジアではアルタイ語とＡＮ語との同時比較くらいであろうか。これら水源地形名の事例からも分かるように、このアジア言語研究にとっては、今後、ＭＡ文化圏における「面的」な広域言語比較を、優先的に検討していく必要があると考える。

一連の本研究によって、アジアやＭＡ文化圏においては、これまでのような、Ａ言語とＢ言語の単語のみを、点と点をつなぐように比較する「単線的」比較言語学的研究のみでは、系統論研究としては、もはや不十分であることが明らかとなった。これからのアジアの系統論研究は、ＭＡ領域を視野に入れ、単語分布を「面的」に「言語の分布層」として取り上げていかなければならないだろう（安部2002.5）。その意味で、東アジアやモンスーン・アジアの言語史研究は、新しい段階に入ったといってよいだろう。

このＭＡの言語史研究は、日本語研究者、韓国語研究者だけでは不可能である。この研究を発展させるためには、第１に、アジア諸言語、ＭＡ諸言語の研究者が、共同して国際的にまた学際的に研究を推し進められるような、世界的学術交流環境を形成していく必要がある。また、このＭＡ研究を共有し、情報交換をしていけるような国際的学会が、将来的には必ず必要となってくるであろう。

懸念されるのは、この東アジアやＭＡの伝統的諸言語や諸方言が、近年の国際化による経済的発展と国境を越えた人的交流のために、急速に衰退や消滅の危機に瀕していることである。この領域の「危機

---

6) さらにもう一つ「湿地・泥土」を表す語*nit,*nutの広い分布が確認できる（日本語・中国語・アイヌ語、ムンダ諸語（サンタール語nut <'dark'>『Mundari-English Dictionary』、後日別稿）。注３の[nag,dag]も含めて今後の研究が必要であろう。

言語」の記録保存と研究は、この東洋の言語史研究にとっても緊要な課題である。そのためにもなおさら、‘モンスーン・アジア言語文化学会’のような、国際的交流学会の必要性を感じているものである。

今後のアジア・環太平洋諸言語、ＭＡ諸言語の研究の進展によって、日本語と韓国語・朝鮮語との間の言語学的位置づけは、より客観的方法によって極めて厳密に相対化させた、新たな解釈が可能になってくると考える。

◀ 参考文献 ▶

鏡味明克（1977）「地名の起源」『岩波講座日本語12』岩波書店
鏡味完二（1958）『日本地名学』東洋書林原書房
佐竹昭広（1955）「古代日本語の色名の性格」『国語国文』24 6
鈴木秀夫（1987）「民族の移動と言語の分布」『言語』16 7、及び鈴木氏の先行論文
宋 敏 （1999）『韓国語と日本語のあいだ』草風館
都 守熙（1977）『百済語研究』亜細亜文化社
橋本満太郎（1978）『言語類型地理論』弘文堂
朴 炳采（1968）「古代三国の地名語彙攷（副題略）」『白山学報』5
李 基文（1975）『韓国語の歴史』大修館書店
李 芳漢（1983）『韓国語の系統』三一書房
あべせいや（1997）『日本語のルーツを探ったら』アリス館
ABE,Seiya(1998·7·28)'Several Strata in the Histrical Formation of Japanese Dialects',(Proceedings of 2nd International Congress of Dialectologists & Giolinguists ;The International Society for Dialectology and Giolinguistics
ABE,Seiya(1998·7·29)Dialectical/climatic features and distribution of terms for watercourses in Asian languages: the case of Japanese,Korean,and Chinese, 'Proceedings of XVII International Congress of Linguists' in CD-ROM,Prague,CIL,
安部清哉（1999.5）「東西方言の諸相と日本語史の課題」『日本語学』18-5明治書院
安部清哉（1999.9）「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線"気候線"」『玉藻』（たまも）35
安部清哉（2000.1）「方言分布と日本語史」『国文学解釈と鑑賞』65-1至文堂
安部清哉（2000.3）「既発表拙論の補足説明と誤植訂正（「秋田方言研究のための語彙表台帳」に付載）」『フェリス女学院大学文学部紀要』35)
安部清哉（2001.8）「東アジア（日本語·韓国語·中国語）の河川地形名の偏在と方言分布·気候との相関」『韓国日本学会（KAJA）第63回学術大会Proceedings』
安部清哉（2001.11）「東アジア（日本語·韓国語·中国語）の河川地形名の偏在と方言分布·気候との相関 配布地図・補論」『玉藻』37、
安部清哉（2002.5）「方言地理学から見た日本語の成立――第3の言語史モデル理論としての"Stratification Model"――」『方言地理学の課題』明治書院
安部清哉（2002.11.10）「日本語の河川地形名の重層とその背景としてのモンスーン・アジア言語の方言境界線」『国語学会2002年度秋季大会予稿集』pp.173-180,
安部清哉編（2003.3）『日本語の方言分布境界線（関越線・気候線）による方言の重層性に関する基礎的研究』平成13·14年度科学研究費成果報告書、私家版
安部清哉(2003.7)「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」『国語学』54-3、
安部清哉（2004.7）「地名と日本語――河川地形名の言語空間」『国文学解釈と鑑賞』69-7
安部清哉（2004.12）「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15、明治書院、
安部清哉（2005印刷中）「近世初期俳諧の語彙と方言分布」『日本近代語研究4 飛田良文博士古稀記念論集』（仮題）、ひつじ書房。

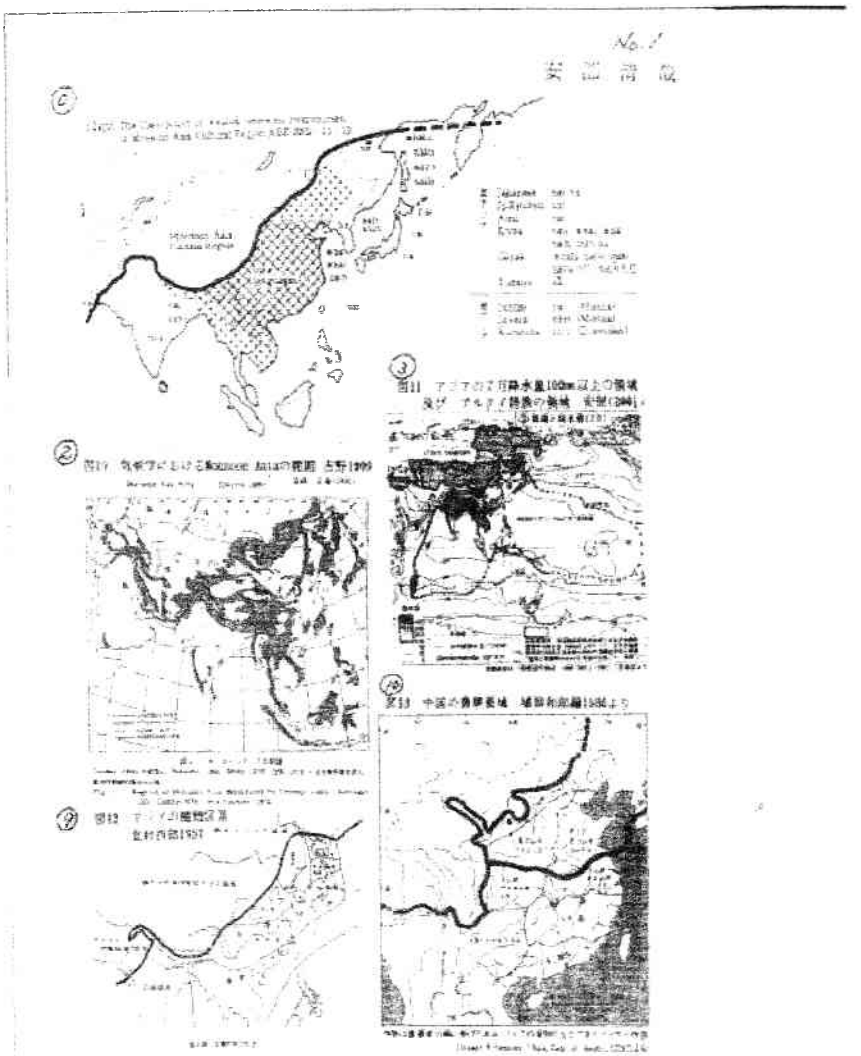
◆【補記：執筆者は、韓国語・北朝鮮語とを合わせKorean Languageの意味で「朝鮮語」を使用しているが、本稿では論文発表国（大韓民国）の歴史的事情を配慮し、韓国語・朝鮮語の両方の表現を混在させたことをお断りしておきたい。】

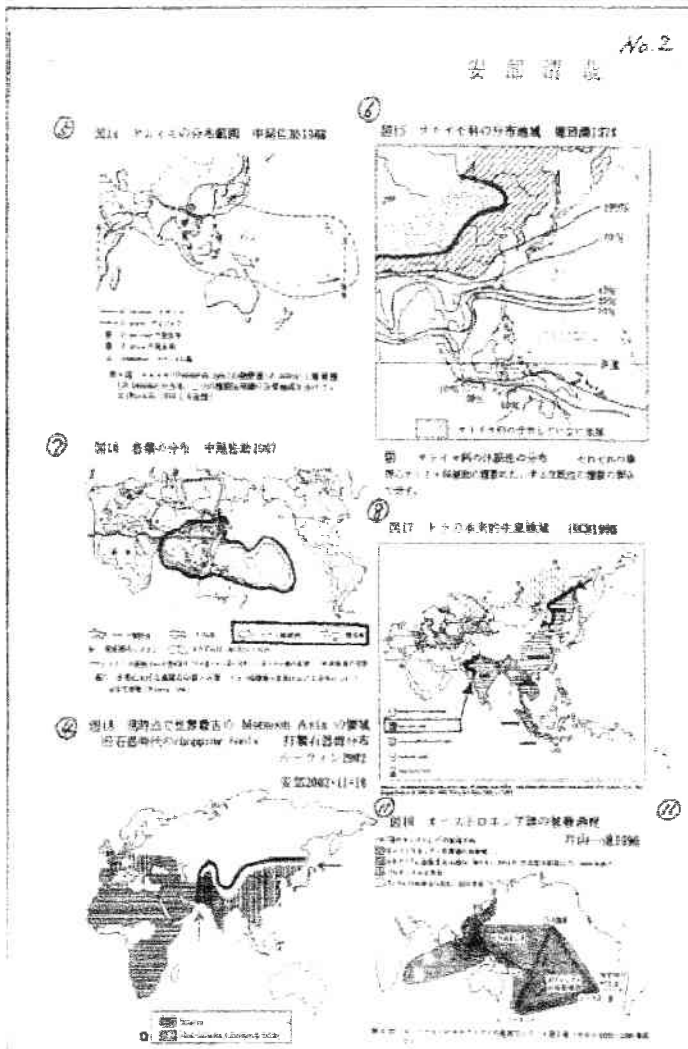
◆【付記1】本稿は、韓国日本学連合会 第2回国際学術大会（2004.7.10,sat.大韓民国・釜山・東西大学）でのシンポジ

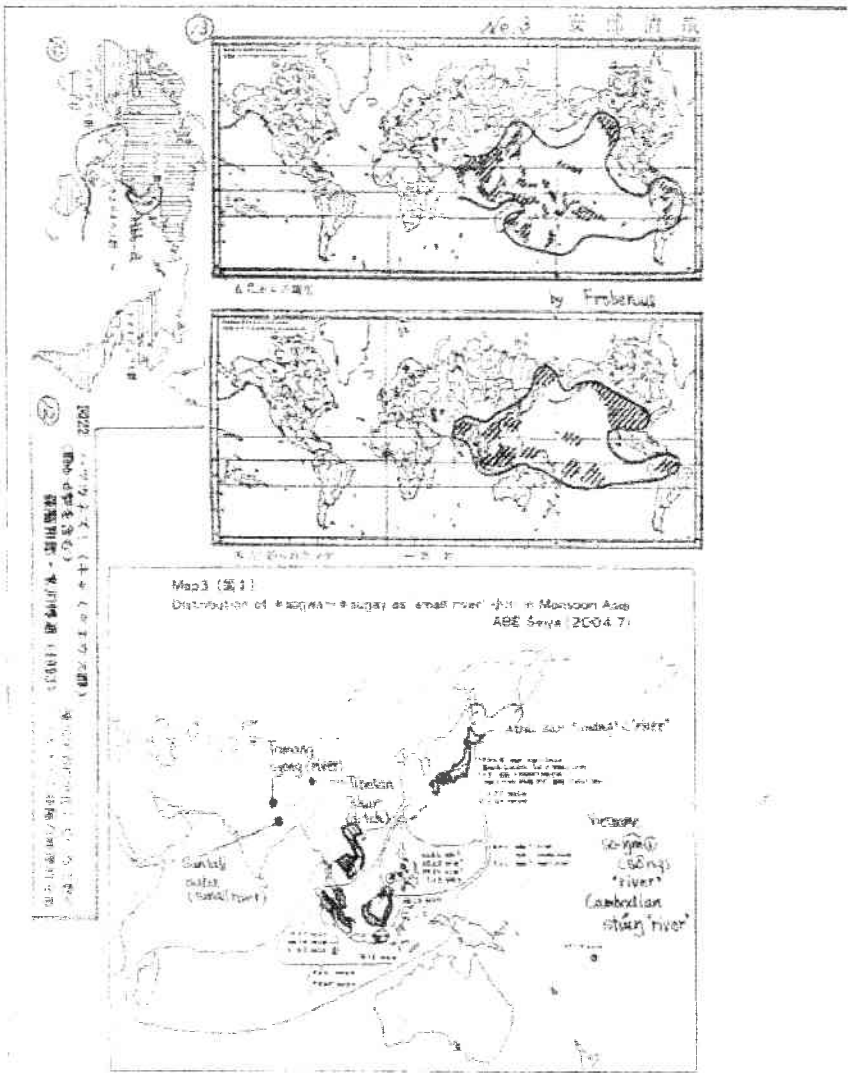
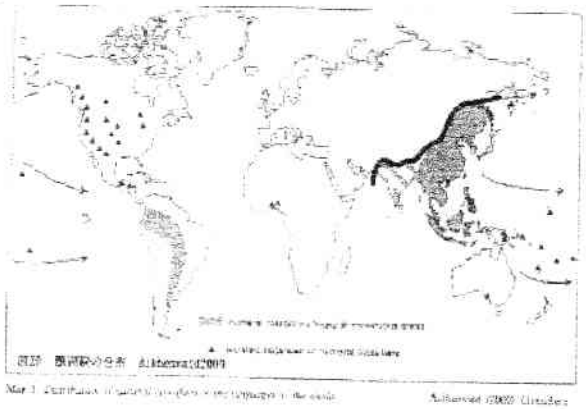
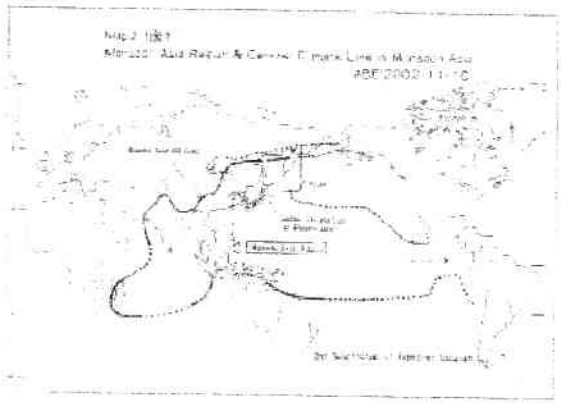
ウム（テーマ「日本学研究の境界」）における招聘講演（日本語学部門）でパネリストとして発表した内容をもととしたものである。当日会場にて、ご質問くださった金大星先生（韓国・全南大学校）のご教授に感謝申し上げます。また、発表と原稿投稿まで、趙堈熙先生（釜山大学教授）にはひとかたならずお世話いただいた。厚く御礼申し上げたい。

◆【付記２】本稿は、平成15－17年度科学研究費補助金基盤研究（C）（２）「言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的、代表者研究」（課題番号15520298：安部）による研究成果である。

◆ 논문접수일 : 2005. 3. 31.
◆ 게재확정일 : 2005. 5. 6.




No. 2
安部清哉


No.3
by Frobenius
Map3 (第3)
ABE Seiya (2004.7)
Tibetan
Sanskrit
(Sindhu river)
Cambodian
'river'